

インターネットラジオ局がつくる“読む”ラジオ

AWAPURADIO

アワプラジオ通信

2016.03

『東京ラブレター』～インタビューシリーズ～

ハッ場ダム計画問題への取り組み と次の世代につけを残さない責任



ハッ場ダムをストップさせる東京の会
代表 深澤洋子さんに聞く

[ふかざわようこ]

2004年からハッ場（やんば）ダム計画問題に取り組み、利根川流域市民委員会事務局、ハッ場ダムあしたの会運営委員など、東京の運動において大きな役割を果たしてこられた深澤洋子さん。最近では東京・多摩地域を中心に電力自由化を進めて、原発のない社会をめざす『電力改革プロジェクト』でも活動中。

ナビゲーター（インタビュアー）

あべこう一、高木祥衣（OurPlanet-TV）

—ハッ場ダム計画問題のこれまでの経緯などについて教えてください。

1947年のカスリーン台風（関東・東北地方に大きな災害をもたらした）をきっかけに、治水計画としてダムが作られました。最初に現地の長野原町（群馬県吾妻郡）にダムを作るという話がきたのは1952年ですから半世紀以上前です。地元の方たちはものすごく反対しましたが、計画がそのときい

ったん立ち消えになったのは、吾妻川がコンクリートも溶かしてしまう強酸性だったからでした。

しかし一度は取り下げられたものの、石灰を川に流し入れる中和事業によってダムは作れるようになったとして、再び計画が起こります。地元の反対は続きましたが、群馬県というところは首相を次々と輩出した土地柄でもあります。ダムを作る代わりにこ

んな支援をします、お金も落としますということで法律も次々と出来ました。何世代にもわたって闘い続けるなんて、普通の人には難しいことですよね。そんな地元の反対運動が収束した頃に下流で反対運動が起こり始めたというズレがあって、運動のほうも複雑で一筋縄ではいかないところがありました。

反対運動の中心になっている嶋津

暉之さんは水問題の専門家です。ハッ場ダムは東京の下流に飲み水を供給するという計画になっていました。嶋津さんがかかわるようになった頃、経済成長期で工場用水がいっぱい使われていました。そこで嶋津さんは研究して、工場用水を再利用するなどというかたちで合理的に使う方法を考えました。そのことによって利水の必要性がなくなって、ダムを止めることができると思ったのですが止まりませんでした。水余りは時間が経つほど明らかですが行政は認めようとしません。

私がかかわるようになった頃というのは2004年です。ハッ場ダム計画は何回も計画が変更されていてももとの計画では2000年に2千億円のはずが、その頃には事業費が倍の4600億円になりました。そこで嶋津さんが朝日新聞に意見を投稿したところ、市民オンブズマンの弁護士さんたちから一緒に住民訴訟をやろうと働きかけがあり、一都五県で一斉に住民監査請求をして、それが住民訴訟になりました。

この12年でその中心となったハッ場ダムをストップさせる東京の会や千葉の会という会ができ、それを統合する市民連絡会というのができました。去年の9月に最高裁決定が出ましたが住民訴訟を闘ってきました。今は2020年の東京オリンピックの年にできると言っていますけど、それも非常に怪しいと思いますね。事業費ももちろんこれから大きくなると思うのですが。

—民主党政権時代にハッ場ダム計画問題は注目を集めましたね。

私たちが前原誠司国交相(当時)が、あれほど止めると言っていたことを(撤回して)再開するとはちょっと思いませんでした。民主党の『コンクリートから人へ』の象徴としてハッ場ダム問題に取り組んでくれたわけですが、(中止は)実現はしませんでした。中止するにはその後の生活再建を支援する法整備が必要だということを政権交代の前から言っていて、民主党も案を考えるなどしていました。それを前原大臣は生活再建支援法をつくるようにと国交省の職員に指示したのですが、まったく無視されてしまいました。

ダムの検証とダムに頼らない治水を考える方針は出したのですが、それを審議する委員会で国交省は私たちが推薦する専門家の人選を拒否しました。それによって議論が御用学者ばかりになって、国交省の考えたとおりの結論が出るというふうになるわけですね。

—『電力改革プロジェクト』ではエネルギー問題に取り組まれています。

3.11の原発事故の後、私が住んでいる多摩地域(東京)の仲間と一緒に欧米などと同じように電力自由化を進めて、原発のない社会にしたいという思いで電力改革をやっているところから始めました。小さなグループですがドイツの先進事例を上映したり、もっと大きなキャンペーンと連携しながら講演会を開催したりしています。

昨年12月には私たちは本当に電

気を選べるようになるのか、自然エネルギーを選べるのかどうかということと講演会を開催しました。4月から自由化が始まりますが、まだ難しくてなかなか自然エネルギーの会社を選ぶということにはならないのですよね。自然エネルギーを選ぶという人が増えれば、取り扱う会社も増えるでしょうが、すぐには実現しなくても、電力の自由化で根本的に原発を無くすシステムに変えていかなければいけません。今後も様子を見ながら活動していきたいと思っています。

—最後に何かメッセージをお願いします。

工事が進んでいるハッ場ダムですが、今後は地質の問題などもあって何が起るかわからないところがあります。代替地(建設のために住民が引っ越した先)には、鉄鋼スラグという有害物が埋められているかもしれないということもあります。一部はもうわかっているのですが、そういうところにも一部の業者と行政によるなれ合いがあります。裁判は終わりましたが、責任を持って追っていきたくて考えています。

きれいに生きるということは、次の世代にツケを残さないことだと思います。お任せにしているのは将来が怖いですね。そういう責任がありますので、市民運動にかかわる自分としては何とか伝え続けていきたいですね。

(まとめ：あべこう一)



東京ラブレター

東京ラブレター

毎週木曜日(内容は月替わり)夜10:00~10:30

●3月のオンエア『ドイツを拠点にドキュメンタリー映像を制作する活動』映像作家 国本隆史さんに聞く

神戸市長田区のコミュニティFM局『FMわいわい』(77.8MHz)の番組『東京ラブレター』の制作を、アワプラジオは手がけています。東京ラブレターは、首都圏で活動するNPOやNGO、市民グループや個人の方を紹介する番組です。

【パソコンで聴く】「サイマルラジオ」にアクセス。「近畿」→「FMわいわい」を選択。※Macの方はWindows Media Playerをダウンロードしてください。

【スマートフォンやipadで聴く】サイマルラジオに対応したアプリ「TuneIn Radio」をダウンロード。(検索窓で「FMYY」)。

●ナビゲーター：あべこう一、高木祥衣(OurPlanet-TV)

『Abe's VIEW』 Vol. 16 「与えられた条件の中でどう生きるか」

誰に遠慮することもなく自分の意見を述べる事ができて、思想信条を曲げないで済む環境はとても幸せです。非正規雇用や貧困の問題から、数年前にリバイバルヒットとなったプロレタリア文学『蟹工船』の著者である小林多喜二。彼が昔の特高警察による拷問の末に亡くなったことはよく知られています。

日本の会社などではその構成員が政治的な主義主張を持つことを嫌います。教養の一つとして知事は求められても、それを逸脱することは許されません。たとえば日本経済新聞は読むべきだけれど、街宣活動に参加するのはNGみたいな。自分の思想信条はあっても、勤めている会社や業界がそれに反する政党と昵懇だから黙っていなければならないどころか、迎合するふりさえしなければいけないというのは本当につらいことです。会社員が選挙に立候補しようと思ったら、ほとんどの場合、退職して縁を切ってからということになるでしょう。

もっとも、今のほとんどの日本人は無宗教無思想。消費者としてちゃんと遇されないことへの怒りはあっても、自分の生殺与奪を握る存在に対して自身の思想信条を飲み込んでグッと耐えろとか、主権者として蔑ろにされたなどと言って怒るとか、そういうことはあまりなさそうな気がします。

深い思い入れがありながら声を挙げられない立場にあっても、「与えられた条件の中でどう生きるか」が大切。私の尊敬する方の言葉です。

多喜二は身体的な拷問によって命を落としましたが、自分を曲げて生きることにはある意味、精神的な拷問だと思います。今は多喜二の時代と違って自由にものが言えるいい時代。果たしてそうでしょうか。

人生という道中で、生きて前へ進んでいくためには地べたに這いつくばって、「俺のブーツを舐めろ」と言われる場面もあるでしょう。そんなときこそ、自分自身の本質が問われるように思うのです。

(あべこう一／本紙編集長、Singer songwriter、Radio personality)

ヨムヨム旅行記 ダブリン (アイルランド)



リフィ川沿いのバー

アイルランドの象徴はグリーンだ。雨が多いおかげで木々の葉は絵の具で塗りこんだように濃く色づき、草地の黄緑は白い羊と対比して鮮やかに揺れる。モスグリーン色の列車は海沿いを長閑(のどか)に走る。3月17日の聖パトリックデーにはダブリンの町がグリーンを身に着けた人々で埋め尽くされる。

ヨーロッパの端の小さな島国に行ってみて私は少し日本と似ているところがあるように感じた。人柄はシャイだけど実はとても優しいし、全てにおいて良い意味の素朴さを感じさせる。いかつい顔をしたパン屋のおじさんは「これがお勧めだよ、食べてごらん」

と武骨な形のスコーンを目の前に出してくれたし、シンプルにバターだけで食べるのが一番だとも教えてくれた。名物のアイリッシュシチューにも豪華さはない。中身は野菜と羊肉と塩コショウのみ。だが少し酸味のある味はまるで実家の味噌汁のように身体をじんわりと温めてくれた。

敬虔なカトリックが多い国だからか、教会や城も至るところにある。石を積み上げただけのシンプルな造りで全体的に小規模で円筒形のものも多い。絵本に出てくるような可愛らしい様相をしている。更にその敷地を囲っているのは木を組んで作った柵だ。

街中を流れるリフィ川沿いには、色鮮やかな花を飾ったアイリッシュパブが並ぶ。彼らはパブでギネスビールを飲みながら聴く音楽と、友人とのお喋りをとても大切にしていると聞いた。ギネスビールのシンボルマークのハーブは、アイルランド最高学府トリニティカレッジで見ることができる。この大学の図書館は圧巻だ。7~8メートルはありそうな本棚の床から天井までびっしりと本が詰まっていて、なるほどノーベル文学賞を多数輩出しているのも分かる気がした。

歌手のエンヤはアイルランド出身だ。青い空、アイリッシュ海のブルーグレイ、そしてエメラルドを思わせるグリーンが溢れたこの国に、彼女の美しく透き通った声はよく似合う。(浅香友里) ※ヨムヨム旅行記は不定期連載です。

家族の勝手にしょ！—写真 274 枚で見る食卓の喜劇— (2012 年 10 月) 岩村暢子 著 新潮文庫・907 円



食卓から家庭を見つめる「食 DRIVE」という調査の 2003 年以降の結果をまとめた本。日本の各家庭で実際に出された朝食、昼食、夕食の内容が、写真とともに紹介されている。本書は、タイトルからもわかる通り、家庭の食事の質の低下について問題提起する意図も含まれている。

最初は、昼食がスナック菓子であるなど、明らかに健康に悪そうな物を見て、優越感混じりの安心感を持って読んでいた。しかし、多くの食事は、「うちにもこんな日、ある」と思ってしまうものであった。各人の皿に盛り付けず大皿盛りにする、味噌汁を毎日では作らない、朝食に菓子パンの類を出すことがあるなど、ほとんど罪悪感もなくしていた事も話題にされており、自分の出している食事が知らないうちに一世代前まで常識とされていたような食生活から外れていたことに気づかされて、申し訳ないような気分になった。

ともあれ、家族構成と食事が出された経緯のコメントのついた写真を眺めていると、他人の家庭を覗き見ているようで楽しい。本書のリアリティあふれる食卓の舞台である各家庭の生活の悲喜こもごもにも思いをはせつつ、食文化を見直してみてもいいだろうか。(大森周子)

投稿ひろば 「感情を大切にできる社会に」

最近のこと。ある人は就職に失敗して。またある人は会社で仕事の結果が出せず上司に叱られる日々が続いて。別の人は、心は男性ですが体は女性であることに悩み、自ら死を選んだという話を聞きました。モバイルテクノロジーが急速に発展して、ここ 20 年の間でこれまでの常識が非常識になっています。一昔前までの知識で世の中に挑んだら、あっけなく撃破されてしまうということがあります。

現代においてエンターテインメントが多様に発展していることはいいことなのかもしれません。それこそ街頭にテレビを観るために集まっていた約 60 年前には考えられない世の中になり、表現の自由に保障されていることを最大限に享受するかのようネット社会では自己主張が繰り広げられて、そこで自分の居場所を得ている人も少なくありません。

でもそんな社会で生きづらさを抱えている人は一体どれくらいいるのでしょうか。人は自由がありすぎても制約がありすぎても苦痛を感じる生き物だと、いつか心理学者が言っていたのを聞いたことがあります。数えきれないくらい枝分けされた生き方の選択肢の中で、自分に合っている道を選ぶことができる人はどれくらいいるのでしょうか。正しく自分を評価できている人はどれくらいいるのでしょうか。

価値観が多様化した世界では、自分の考えが合っているのか間違っているのか分からなくなるのは、ある意味当然なのかもしれません。何を考え、何を選んで、どう生きるのか。自分の軸を持って生きることがいまこの国で生きる人にとって、一番難しいような気がします。

学歴なんて当てにならないけど、努力の差、人間性の深さ、許容力は話せば簡単にばれてしまう。冒頭で挙げた人たちが持っていた、繊細さや強い感受性や優しさこそが、本当は最も認められるべき資質なのかもしれません。社会がこれらを邪険に扱っているように思えます。感情を持つ人間が、感情を大切にできる社会になるにはまだまだ成長が必要な気がしました。(青柳蓉子) ※投稿ひろばは不定期コーナーです。

- ・ 2 月号の『Awa Report』文中にある『人体の生理学』は『人体の解剖学』の誤りでした。お詫びして訂正いたします。
- ・ 今月の『Awa Report』はお休みいたします。

告知ボード

あべこーろ講演「ゲイのシンガーソングライターである僕がいま考えていること」

日時：2016 年 4 月 4 日 (月) OPEN 18:30 / START 19:00

会場：リン・グレイス (地下鉄『赤坂見附駅』7 分)

参加費：3,000 円 (軽食付き)

主催・連絡先：株式会社リン・グレイス (港区元赤坂 1-4-21 赤坂パレスビル 2F nonchi@ringrace.co.jp 03-5775-4877)

最新号は千代田区社会福祉協議会 (東京) の中にあるちよだボランティアセンターに置かせていただいています。また、アワラジオやあべこーろがかかわるイベント等でも配布しています。バックナンバーがウェブ

サイト上でダウンロードできます。置き場を提供して下さる方も随時募集しています。発送を希望される方もお気軽にご連絡ください。

<アワラジオとは>

NPO 法人 OurPlanet-TV で出会った仲間と、2009 年に開局したミニ FM、インターネットラジオ局です。名称は OurPlanet-TV の略称であるアワプラにちなんでいます (アワプラとは別々の団体です)。

編集長：阿部浩一

発行：アワラジオクリエイティブ

107-0052 東京都港区赤坂 3-21-5 三銀ビル 3F サポートコール内

info@awapuradio.com

TEL: 03-6856-0722 FAX: 03-6856-0723

http://awapuradio.com/